

# 図画工作科

宮 本 美 紀

## 1 図画工作科における学びを豊かにする聞き合い

図画工作科における  
知識

図画工作科では、教科で得られる知識を次の三つととらえている。それは、  
①もの（材料、道具などに関すること）②技能 ③見方、感じ方である。

実践的な実感

子どもは、自分の願いを実現するために価値観をもとに、もっている知識を生かして表現しようとする。だが、その知識が狭く、浅い場合は画一的な表現になったり思い通りの表現にならなかったりすることがある。そこで、新たに知識を習得し、それを蓄積していく学習が必要になる。

図画工作科では、それらの知識は言語的な理解だけでなく実践を通じた実感も含まれる。それらの価値を実践的に実感することで一人一人の価値観は広がり更新され、固有な表現が生み出される。そして、図画工作科における聞き合いの活動では、一人一人の言語的な理解や実践的な実感が、他の様々な価値観の受容を促すことになる。

このような考え方から、図画工作科における学びを豊かにする聞き合いを以下のように定義する。

**造形との新たなかかわりを生むために 自他の知識や価値観が共有される聞き合い**

造形とのかかわり

「造形とのかかわり」とは、周りの対象からよさや美しさを感じ、考え、表現することである。それを支えるものは、造形に対する知識や価値観である。学びを豊かにする聞き合いを通して、子どもがもっている知識に広がりや深まりが生まれることを関係づけといい、それをもとに、新たな造形につながる価値観が生まれることを再構成という。子どもは、再構成された価値観をもとに自分の願いを色や形に託して、造形との新たなかかわりを実現させていくのである。

## 2 聞き合いのために

### (1) 子どもにつけたい態度

造形的な創造活動に必要な基礎的な能力として、発想や構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力の三つがある。各題材における試行、製作、相互評価のプロセスのなかで、どの能力に焦点をあてた学習なのか、子どもに意識化させる。習得する能力を自覚させることで、学びを豊かにする聞き合いは促される。

### (2) 子どもに共有させておきたいこと

造形を成り立たせる要素は主に四つある。形、色、材料、構成である。子どもが互いの造形を聞き合うとき、聞き合う要素が混沌としていては、聞き合う内容は深まらない。子どもに、造形要素を分けてとらえる見方を共有させたい。

子どもが、試行、製作、相互評価するなかで、造形要素を分けてとらえられることで、それぞれの要素について価値づけすべき観点を見出しやすくなる。また、見出された観点を軸に、各題材に取り組むにあたっての活用知識※3が広がっていく。

※3 活用知識

単元や題材で特に活用  
していく価値があるもの  
として位置づけられる  
知識のこと。

(本校必要第63集)

### 3 関係づけ再構成する手だて

#### (1) 実践的な実感につながる試行

表現における試行	造形的な知識を習得するには、その造形に働きかける行為のおもしろさ、行為の結果生まれてくるよさを充分に感じ取らせることが大切である。
	表現の場では、知識の意味やよさに気付くためには実際にやってみなければ理解できない。そのために、全員が習得のための学習を経験し、更に一人一人が試行してみる。自分の願いを形や色に託す中で試行することが有効であり、それが習得のための活用につながる。言語的な理解だけでなく実際に表現することによって、新たな知識は獲得される。このような試行過程を経ることで、実践的な実感をともなった知識の関係づけ再構成が可能となる。

#### (2) 分類の観点の明示

他との比較	試行を経て、子どもは自分なりの知識を獲得する。そして、他との比較によって、多様な知識を共有する。さらに、それらの知識を分類させる。分類することで、子ども相互の知識は関係づけられる。そのとき、明示された観点による分類に取り組むことによって、子どもは、課題にせまる再構成へと向かう。分類の観点としては、発想や構想、技能など能力に関すること、あるいは、形、色、材料、構成など、造形要素に関することがある。
分類の観点	

#### (3) 活用知識の明確化

表現における活用知識 相互評価における活用知識	表現の場において、活用知識を明確に位置づけることにより、子どもはそれを起点とし思考を展開していく。また、相互評価の場においても、活用知識を軸に交流させることで、関係づけ再構成が促されていく。
----------------------------	---

#### (4) 相互評価による言語化

相互評価によるよさの共有	子どもは、自分の願いをもとに、感じ、考え、表現する。製作の途中や終末に行う相互評価の場で、自他の表現の意図や効果を言語化し比較することで、そのよさが共有される。表現のために選んだ知識の意味やよさを再認識することで、更によりよい表現をめざす意識にもつながっていく。
知識を広げる相互評価	子どもは、既存の知識の中から必要なものを選択する時に、ただ知っていたり何となく好きだったりするものを選ぶことがある。そして、他の多くの知識に目を向けることなく表現し始めてしまう場合が多い。そこで、選ばなかったものについて理由や根拠を言語化してみる。なぜ、それを選ばなかったのか、選ばなかった知識の意味を考えさせるのである。それまで、思いの外にあった知識を相互評価の場などで比較し再認識することで、活用できる知識はこれまで以上に広がり、広い視野で知識の価値を理解することができる。 また、子どもが感じ、考え、表現したことを様々な場面で言語化することで、自らの価値観の変容を実感することができると考えている。 相互評価によって表現の意図や効果、よさの言語化が促されていくことは、関係づけ再構成の聞き合いを充実させる。

#### (5) 思考プロセス全体の概観

妥当性のある選択	どのような題材でも思考プロセス全体を想起して概観できることは、自らの迷い、選択、判断を客観的にとらえさせ自省的に見つめ直す場を生む。試行過程を経て、より妥当性のある選択をするためには、課題の条件をあらためて意識し、思考プロセス全体から再考する必要がある。プロセス全体を概観する見方、考え方は、より広がりや深まりを伴った関係づけ再構成を生む。
----------	--

#### 4 実践例

6年生「はさみでダンス」の実践をもとに、図画工作科教科理論に述べられている手だてが「関係づけ再構成」に有効であったか述べていく。図画工作科では、五つの手だてを設定した。五つの手だてが、「関係づけ再構成」にどのように機能したのか、子どもの作品の変容や評価の記述から分析する。

##### (1) 実践的な実感につながる試行


「はさみでダンス」は、紙を材料に、形と色による抽象的な構成を行う題材である。子どもが自由自在に紙を切ることを楽しみ、生まれた形と色の組み合わせや、構成を工夫しながら、自分なりの表現を追求することをねらいとしている。

新たな知識獲得のために、まず、個で①形、②構成、③色の三つの造形要素に分けて試行させた。①、②については、切りとった形やそれらの構成から生まれる形に着目しやすいように色の要素を取り除き、白い紙を用いた。③については、曲を聴かせ、そのリズムとメロディーを色に置き換えさせることで色の選択を試行させた。このような活動を通すことで、子どもは新たな見方や感じ方に気付き、それを活かした自分なりの表現につなげていくことができた（資料1）。

		
① 形・切るテクニックの試行	② 構成・配置の試行	③ 色：選択の試行
びっくりした！！○，△，□だけで、こんなに不思議な形ができるなんて！！	曲を配置で表現するときに、動きや流れに気がつけました。	（曲を聴いて）リズムとメロディーを2色で表してみると、白だけのときよりもイメージがしっかり表せた。

資料1 実践的な実感をともなった知識の獲得

また、②については、形の要素も限定し、四角形のパーツのみでの配置にも取り組ませた。「とける」「つむ」「はじける」「ねじれる」など動きのあるテーマを与え、配置でイメージを表現させた。色と形の同じパーツを用いても、配置の工夫一つでさまざまなイメージを表せることに子どもは気付いていった。さらに、グループによる共同的試行にも取り組ませたことで、子どもの感想からはより多くの知識に触れられた様子がうかがえた（資料2）。

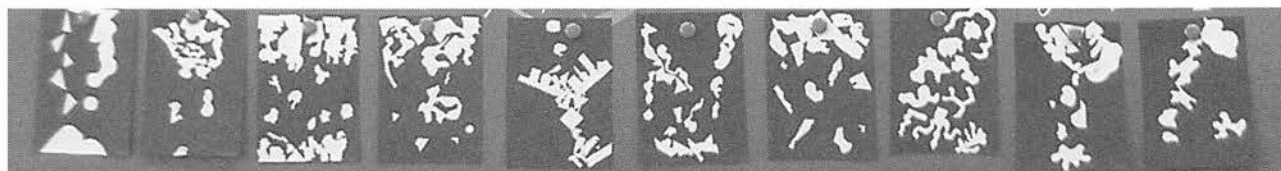
	配置をかえて工夫するだけで、いろんなイメージを表すことができることがわかって、おもしろいと思いました。
	ただの四角形を並べるだけでも、交わせたり、重ねたりすることで、ふくざつな形を生むことができることがわかりました。
	方向や重ね方によって、イメージが変わってくるので、配置を考えるだけでも楽しかったです。
	ラインを曲線にするか直線にするかによって、全く感じが変わることがわかりました。

資料2 共同的試行による多様な知識の獲得

個の試行、さらに共同的試行によって、子どもは新たな知識を見つけていった。個々に形、構成、色の実践的な実感を体験することで、関係づけ再構成のある聞き合いのための言葉をもつことができる。

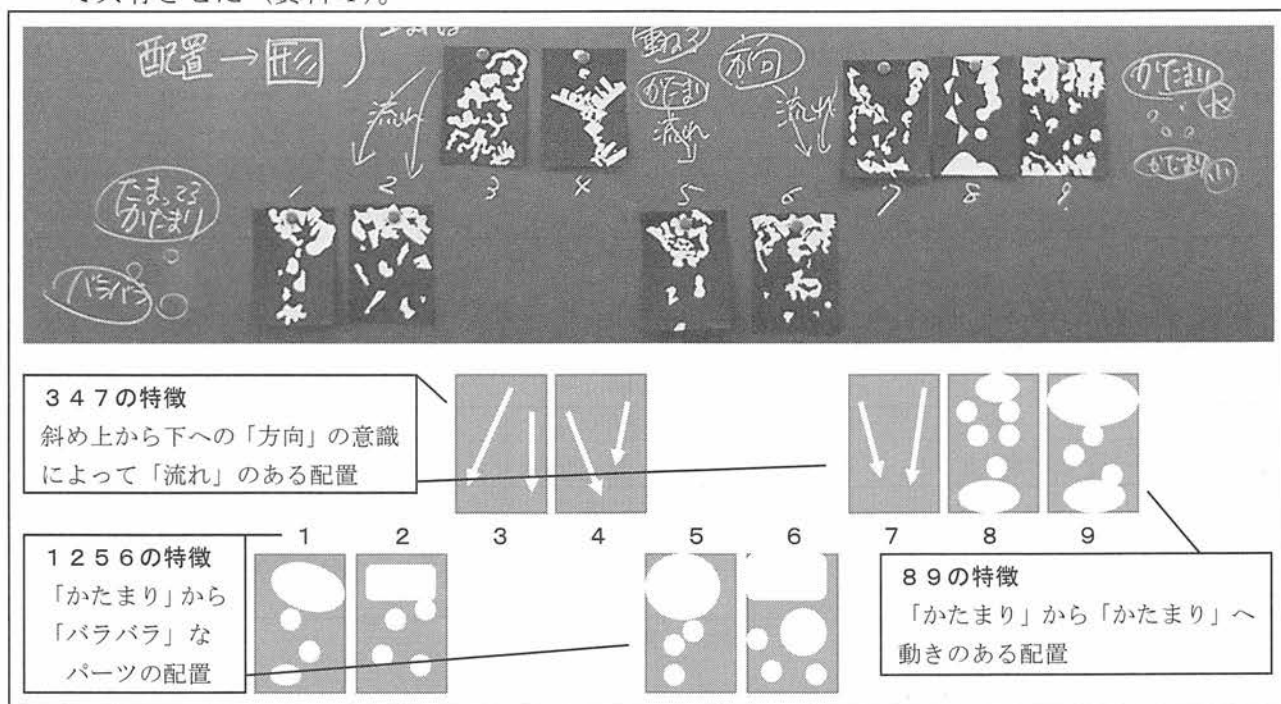
## (2) 分類の観点の明示

試行によって得られた知識とその実感を聞き合いによって共有させるために、互いの知識を比較、分類させる。本題材では、中心的な造形要素となる配置の工夫を取り上げた。例えば、「おちる」をテーマにした試行で、その配置の工夫はさまざまである（資料3）。



資料3 「おちる」をテーマにした配置の工夫

これらの配置の特徴を観点にして共通点、相違点を比較することで、子どもは以下のように分類した。そして、見出された共通点をもとに分類し、配置の工夫をキーワード化していった。それらは、「重なり」「かたまり」「バラバラ」「方向」「流れ」などの配置ポイントとして共有させた（資料4）。



資料4 配置の特徴を観点にした分類によって見出された配置ポイント

さらに、「積む」「はじける」「ねじれる」をテーマにした配置の分類も行ったが、「上に」「ななめ」「放射状」といった「方向」や、「広がり」「交わり」といった「空間」、「直線」「曲線」といった「ライン」も、配置ポイントとして見出された（資料5）。

「積む」をイメージした配置	「はじける」をイメージした配置	「ねじれる」をイメージした配置
T: どんな特徴がある？ C: <u>上に上に</u> <u>重ね</u> ている C: <u>上へ</u> T: つまり？ C: <u>方向</u> C: あんまりななめにしていない T: それも <u>方向</u> だね	T: 何か特徴で似ていることない？ C: <u>かたまり</u> がある T: <u>かたまり</u> から？ C: とび散ってる！！ C: <u>放射状</u> に T: <u>かたまり</u> から <u>広がり</u>	T: どんどころが似ている？ C: <u>ねじれてる</u> シャネルみたい C: <u>交わってる</u> 遺伝子みたい C: <u>カーブ！！</u> <u>曲がってる</u> T: <u>ライン</u> が <u>曲がってる</u> んだね

資料5 さまざまな試行の分類から見出された配置ポイント

このように、観点を明示した分類のプロセスを経ることが、図画工作科における関係づけの手だてになった。分類によって得た子ども相互の知識は関係づけられ、以降の学習における活用知識となる。

### (3) 活用知識の明確化

形、配置、色の三つの造形要素に分け、活用知識を明らかにする場を設定する。

- ① 形 …紙を自由自在に切るテクニック、切る形の発想方法
- ② 配置 …配置ポイント
- ③ 色 …曲をリズムとメロディーに分けて色に置き換える方法

三つの造形要素について、活用知識の習得、試行の過程を経たことで、子どもはそれらの知識を課題解決に向けた思考の起点とし、相互評価したり自分自身の表現と向き合ったりできるようになっていった。

### (4) 相互評価による言語化

自他の表現のよさを相互評価することで言語化が促される。本題材では、切り方のよさ、色の選択のよさ、配置のよさを観点に評価させた。明確な観点を軸にした評価活動により、子どもは互いの知識を関係づけて発想するようになった（資料6）。

Hさんの作品は、 <u>かたまりと空間</u> があって、フラメンコをうまく表現できていると思います。 <u>細長い三角形をたくさん集めて</u> 、はじける感を表現したり、 <u>丸を集めてリズムのつながりを表現</u> したり、 <u>細長いギザギザを集めてトゲのあるメロディー</u> を表現しているのでいいなと思いました。
Mさんの作品では、 <u>空間</u> のつくり方は、 <u>大きなかたまりと小さなかたまり</u> のゾーンをつくっていて、とてもフラメンコらしい。 <u>大きなかたまり</u> の方は、大きい音、 <u>小さなかたまり</u> の方は、小さい音という感じがするから。
Hさんの作品は、私に足りなかった「 <u>色</u> 」がとてもあざやかだった。いろいろな <u>色の組み合わせ</u> が不思議な世界をつくっている。 <u>はさみのテクニック</u> も、 <u>円</u> がたくさんあるのに、私のようにガタガタしていなくてすごいと思った。

資料6 相互評価による言語化

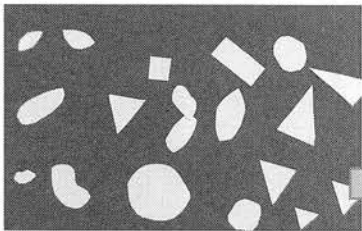

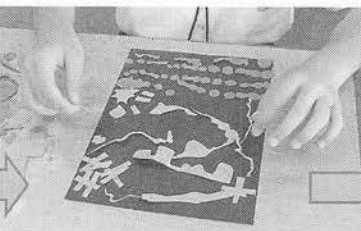
テクニック面で、あるいは、形、配置、色といった発想面で、子どもは以前と今の自分の状態や選択を比較し見つめ直した（資料7）。このように、習得する能力や造形要素を観点に表現のよさを言語化することが、関係づけ再構成そのものであると私は考えている。

最初は、あまり上手く切れなかったけれど、 <u>曲に合わせて切っていくと</u> 、 <u>上手く切れてきたので良かった</u> です。しかも、練習のときも本番のときも、 <u>リズムやメロディーの流れを表現できるようになったので良かった</u> です。
私は今まで、「まとまり」というキーワードを重視してきたけれど、 <u>今回はちょっと変えて「バラバラ」を重視した</u> 。
今回ダンスしたタンゴは、 <u>はげしい曲なので</u> 、 <u>前回よりも直線の形を多くしました</u> 。 <u>色を選ぶときに</u> 、メロディーの色を赤やオレンジにしたら良かったかなあと 생각합니다。

資料7 変容の実感

### (5) 思考プロセス全体の概観

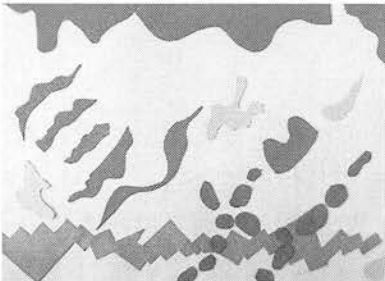
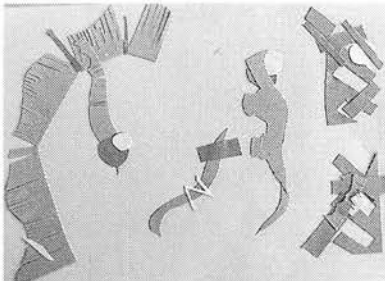
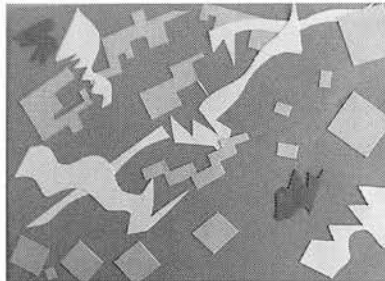
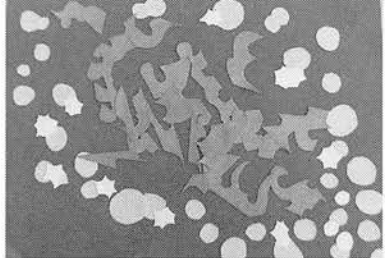

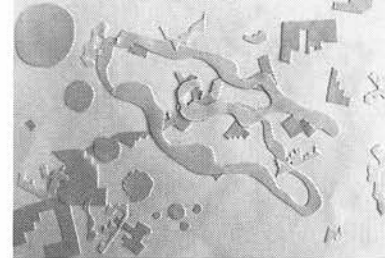
試行過程を経て、題材の最後に自己選択を積み重ねる製作の場を設定した。ここで妥当性のある選択を促すために、思考プロセスを概観させた（資料8）。

			製作の場
① 形・切るテクニックの試行 ○△□や直線、曲線の組み合わせで、自由に形を生み出すことができそうだ。	② 構成・配置の試行 みんなで見つけた配置ポイントを活かして、いろいろなイメージを表せそうだ。	③ 色・選択の試行 色の要素も加えると、さらに複雑なイメージも表現できそうだ。	

資料8 「はさみでダンス」における思考プロセス

最後の製作ではフラメンコを聴かせ、そのイメージを表現させた。色、形、配置の選択によって自分なりのイメージの表現が生まれるという気づきは、子どもの固有な表現を引き出した（次項資料9）。図画工作科においては、このような表現の固有化、多様化こそが、価値観の再構成の根拠になる。



		
<p>色の選択によるイメージの実現</p>	<p>形の切り方によるイメージの実現</p>	<p>配置によるイメージの実現</p>
<p>フラメンコは明るい感じだと思ったので、リズムを黄緑、メロディーをオレンジ、ベースを黄色にしました。</p>	<p>一番目立つピラピラのパーツは、フラメンコのメロディーの感じを表したつもりです。</p>	<p>ずっと足音がしてカタカタゆれる感じがしたので、配置をゆれる感じにするとフラメンコらしくなった。</p>
		
<p>流れを活かした配置</p>	<p>重なりと空間を活かした配置</p>	<p>交わりを活かした配置</p>
<p>流れを活用して、遠くから聞こえてくるすてきなフラメンコを表現しました。</p>	<p>重ねることを重視した結果、まとまりができて、空間も生まれた。クロスさせる重ね方を中心にした。</p>	<p>配置はリズムとメロディーを交わらせて、音が重なるのをイメージしました。</p>

資料9 固有な表現となって表れる再構成された価値観

## 5 成果と課題

試行段階では画一的で荒いものだった表現が、関係づけ再構成のある聞き合いを経て、一人一人の価値観を反映し固有で緻密な表現へと変わった。関係づけ再構成する手だては、子どもの学びを豊かなものへと変えたのである。

試行は、子どもに実践的な実感をともなった新たな見方、感じ方を生み、それらは観点を明示し分類することによって関係づけられていった。本題材で取り上げた活用知識は、試行や分類を経て明らかにしたものである。これらを抜きに相互評価は成立しない。個々に獲得された発想やテクニック、見方・感じ方や評価の観点となる三つの造形要素といった活用知識があつてこそ関係づけ再構成に向かう言語化が促されたことは、相互評価の内容からも明らかである。

さらに、このような思考プロセス全体を概観させることによって、これらすべてが選択可能な知識として子どもに理解された。五つの手だては個々に働くのではなく、つながりあつてこそ効果を発揮する。五つの手だては相互作用しながら機能し、どれも関係づけ再構成のためには欠かせない一連の手だてなのであり、それらをつなぐ授業デザイン意識が不可欠なのである。

このような手だてによる学習活動を支えるものとして、造形要素を形、色、材料、構成などに分けてとらえる見方は、子どもの思考や聞き合う内容をより具体的なものと変えた。また、発想・構想の能力なのか、創造的な技能なのかといった習得する能力についても意識化させたことで、子どもは目的意識をもって取り組むようになった。自己の変容について語る子どもが増えたことがその根拠である。

しかし、これまで述べてきた言語化による聞き合いのよさが、他の製作場面でも活用される質のものとなっているかはさらなる検証が必要である。現在の学習指導要領で重視されている「生きる力」は、自ら考え、判断し、問題解決を実現する主体的な姿勢が重視されている以上、本題材でしか活かされない学びは不十分であるとし評価できない。よって、これからの課題として、聞き合いのよさの実感を学び方のよさとして子どもに意識化させるためのさらなる手だてやその実践的要件を明らかにしていくことが挙げられる。